

朝岡康二著
『古着（ふるぎ）』

法政大学出版局
（二〇〇三年）

私達の衣生活について、資源の有効利用と環境保全の視点から問い直してみる。衣服のリユース（中古衣料としての利用）は循環型社会を形成するための有効な手段の一つです。国内での中古衣料市場の伸び悩みが指摘される中、この本「古着 衣生活の変容とリサイクル文化」を目にしました。

本書は近代以降の衣生活の変容を、衣服の仕立てと着方、管理と保存、再生と再利用など日常生活の具体的な変化として捉え直しています。記述が専門書に近いため、やや読みにくいかもしれませんが、内容的には衣生活の変容を多方面から捉えた生活文化史として興味深いものがあります。特に、化学繊維の生産が開発された以降の「古着の現在」については、輸出された古着が東南アジアでどのように受け入れられているか、また若者に人気のファッション系古着としての輸入古着の増加など、衣生活の現状を解説しており読み応えがあります。古着には着用者の個性や置かれた状況が反映され、継ぎ当てや刺し子など衣服（布）をめぐる創意工夫が生産と流通の発展を促し、リサイクル文化を形成してきました。人から人へ繰り返し着用され受け継がれていく古着は単なるポロではありませぬ。古着に対する「貧困者に譲る」という感覚

は、大量生産・大量消費を促す風潮下にあって形成された偏見のように思われま

す。読み終わると、衣服を繊維資源として大切に繰り返し使用した時代を顧みて、暖衣飽食の時代といわれる今日の衣生活を直視してみようという気持ちになりま

す。蛇足かもしれませんが、私のように「小生の息子があまり本を読まない」とお嘆きのお母さんにはこれがお薦めです。

デルトラ・クエスト（第一部八冊、第二部三冊）、エミリー・ロッタ作、岡田好恵訳、岩崎書店（二〇〇三）。デルトラ王国の若き王子が仲間と共に邪悪な侵略者から国民を守るという定番の冒険小説ですが、ハリーポッターより展開が早く一話完結型で集中して読めます。親子で読んで楽しめます。これをきっかけに読書が好きになって欲しいですね。

与倉弘子（教育学部助教授）



小室直樹著
『痛快！憲法学』

集英社インターナショナル
（二〇〇一年）

私ごときがこのようにいうのは僭越であるが、あえていわせていただくなら、小室直樹師は天才である。とりわけものごとのエッセンスをたちどころにつかむ理解力、そして、それを伝える教育力に

おいて。私は経済学部出身である。しかし正直なところ、経済学がどのような学問であるのか、学部の講義を聴いていてもちつともわからなかった（不真面目だったせいもあるが）。それが、師の自主講義を

一時間受けただけで腑に落ちた。少なくともわかった気になれたのである（経済学だけではない。宗教社会学、政治学、数学、物理学や統計学までと師の領域は

及び。経済学はサミュエルソン、宗教社会学は大塚久雄、政治学は丸山真男から習ったそつである）。

さて、本書はその小室師よりなる憲法の本である。したがって通常の法学の教科書のような憲法解釈の本ではまったく

ない。一見、サラリーマンのためのわかりやすいノウハウ本といった装丁であるが、そういうものでもない（わかりやすいのはたしかであるが）。憲法が生まれ

てきた経緯、その拠って立つ宗教的文脈、憲法のもつ社会的意味がふんだんに語られる、内容重厚な本である。

語り口はゼミナールの雰囲気そのまま

である。師が設問を出し、生徒（この本では編集者の「シマジくん」なる人物）が答え、その誤りを正す形で議論が進んでゆく。たとえば「日本国憲法は生きて

いるか死んでいるか」との問いかけに「シマジくん」が「廃止されていないから生きています」と答える。すると師が、公式に廃止されていなくても、社会的に機能していない（つまり死んでいる）法もあるということを説明する。結論として、師の認識では日本国憲法は「死んでいる」。

この結論に異論を唱える読者もいるだろうし、また専門家によっては個々の事例や解釈に異を唱えるかもしれない。しかし読後には憲法や社会の正当性といった問題について、深い理解を得られることとは間違いなし、また文句なしにおも

ともわかった気になれたのである（経済学だけでなく。宗教社会学、政治学、数学、物理学や統計学までと師の領域は

なく、その有機的連関であるといわれる。本書は著者、小室直樹師がその博識を動員して行った、まさしく総合的な憲法分析の書なのである。

永田えり子（経済学部助教授）

